

万葉集の海洋性

井上

豊

はしがき

日本は四面海に囲まれていながら、海洋文学にはほとんど見るべきものがない。これについてはさまざまの事情が考えられるが、古代においては比較的に海洋性がゆたかであった。海洋文学として独立したものはほとんどないが、後世にくらべると海洋性に富んでいる。古事記や祝詞にもそうした傾向がみられ、万葉集なども海洋文学といった点から大きな特色をもつ。

万葉集は全体としてみると山を中心とした文学といえるが、水の文学としても大きな特色をもち、とくに海洋性といった点から独自なものがみられる。高木市之助氏は「日本文学の環境」において、万葉集の環境として「清」なる自然をとき、海についても「きよし」「さやけし」といった意識が顕著な点に注意された。また久松博士の「日本文学―風土と構成」にも日本文学の風土性を論じ、水辺文学を河畔文学、湖畔文学、海辺文学にわけて、「河畔文学が流動的な点があり、海辺文学が茫洋たる点があるに對して湖畔文学は深沈の趣がある」、とあるが、(「国文学」等にも再説されている。)万葉集についてもこうした三方面からの考察が必要と思われる。

海の文学は同じく水を中心とした文学として河畔文学や湖畔文学と共通性ももっているが、海洋は海洋として独自

性をもつので、こゝには海洋性といった点から万葉集の特質を者えてみる。

まず海は恐怖の対象であった。航海術も次第に発達しつゝはあったであろうが、なお幼稚を免れず、船旅には不安がつきまとうたので、恐怖感が先だったのも自然のことであった。恐怖感を伴う点において海は河や湖と区別される。河や湖の歌が優美に傾き易いのをたいして、海の歌は壮美性を帯びる傾きがある。

卷二には人麿が讃岐の狭岑島で石中の死人をみて詠んだ長歌がみえ(二二〇)、卷十三にも海岸で屍を見て詠んだ同趣の長歌三首がのせてあるが、うち一首は「或本歌」として、調使首が備後国神島の浜で作った由詞書に見える(三三三、三五、三三三六、三三三九)。卷十六には筑前国の志賀の白水郎をうたった歌十首がのせてあるが(三八六〇—九)これは左註によれば、神亀年中筑前の国淳屋郡志賀村の荒雄という男が、俠氣で対馬に糧を送る船頭を引受けたところ、暴風雨に遭って死んだのを悼んで妻子等が詠んだ歌という。憶良の代作とも伝えられ、両者の混合ともみられて、作者については問題がある。主として憶良の作と見るべきであろうが、とにかくこうした海上での悲劇はほかにも多々あったことであろう。

したがって遣唐使などのような長途の航路には多大な不安と恐怖をとめない、海神等の力にすがったりしている。

卷七に、

大海の波はかしこしかれども神をいはひて船出せばいかに(二二三二)

といったような歌も見えるが、憶良の「好去好来歌」(八九四)は天平五年遣唐大使に献じたもので、「海原のへにもおきにも 神づまり うしはきいます もろもろのおほみかみたち ふなのへに みちびきまをし あめつちの

おほみかみたち やまとの おほくにたま ひさかたの あまのみそらゆ あまがけり 見わたしたまひ、云々」というように天地の神力をたのんで、祈願というよりはむしろ祝福の意を表している。同じく天平五年(七三三)入唐使に送ったという卷十九の長歌(四二四五)では住吉の神に呼びかけ、より多く祈願の気持が勝っている。卷十九のは作者不明で、高安倉人種麻呂が伝誦したとあるが、「吾がせの君を」とうたっているから、近親の女性の作であろう。天平五年の遣唐使は丹治比真人広成で、卷八にも笠金村のよみ送った長歌(一四五三)がのせてある。金村の歌にも、「なにはがた 三津の埼より 大船に ま楫しじぬき 白浪の 高き荒海を 鳥つたひ い別れゆかば とどまれる 吾は幣ひき 斎ひつつ 君をばやらむ」というように、神力にすがり気もちがみえる。卷九に「天平五年葵酉遣唐使の船難波をたちて海に入る時母の子に贈れる歌」(一七九〇)とある長歌も同じ時のものらしく、やはり神力をたのみつゝ子を思う親の不安な気もちが強く出ている。有名な、

旅びとのやどりせむ野に霜ふらばわが子はぐくめあめのたづむら(一七九二)

という歌が反歌になっている。卷十九には光明皇后や孝謙天皇が遣唐大使の藤原清河に賜った御製其他(四二四〇以下、四二六四)ものっているが、歌そのものは儀礼的な形式化した作が多いにしても、やはり不安な気持が根柢になっている。卷十五には天平八年新羅に遣わされた使人等の歌が集めてあって、こうした旅路の苦難の実況が想像される。遣唐使というような国家的な使命をおびてでかけたものでも、途中で漂流したり異境に留ったまゝ歿したりする例が少なくなかったようで、藤原清河なども唐土で世を去っている。

卷十七には大伴旅人が大納言に任せられ太宰府から上京した時三野石守らが海上でよんだ歌がのせてあるが(三八九〇—九)、船旅の悲しみに帰京の喜びが結びついて味い深いものになっている。防人は難波から海路で筑紫へ行ったらしいが、卷二十に大伴家持が防人の海上の旅を思いやっつてよんだ長歌があり(四三三二)、また防人の身になり代っ

て「悲別の情」をのべた長歌がある(四三三・四四〇八)。遣新羅使人や防人歌については後に改めてのべるが、とにかく海上の旅の不安と労苦は今日からしては想像外といってよいが、反面にはこうした事情が真実味に富んだ秀歌をうむ原因にもなつたらしい。これは海に限らず羈旅歌一般についても考えられる。

結殊のものとして配流関係の歌がある。

うちそををみの王あまなれやいらごの島の玉藻かりをす(二三)

うつせみのいのちををしみ波にぬれいらごの島の玉藻かりをす(二四)

これは天武天皇の御代に麻績王が伊勢の伊良虞の島に流されたとき(配流地については問題がある)、時人と唱和した歌という。配流の悲しみと結びついて哀感の切なるものがある。また卷六には石上乙磨が罪によって土佐に流された時の贈答の歌が見えているが、海路をよみこんでやはり独自の哀感をもよおさしめる。これらは配流の悲哀に海辺生活や海上の旅の苦しみが重なって独特の趣を感じさせるものである。

二

かように海は死や配流生活と結びついて忌わしい感じをとめないがちであり、不安や恐怖の対象とされたが、そうとばかりもいえない。反面には憧憬の対象とされ、享樂遊覧の場所ともなっている。

古代人は海波のかなたに常世の国を想い、海底にわたつみの宮を考えた。山間生活に閉じこもりがちな万葉人が自己否定の場所として海に憧れたのは自然のことであった。高木市之助氏は万葉人の「清」が吉野を中心と説いているが、万葉人の「清」は海辺にも及んでおり、山間の清とはちがった開放的な大らかな「清」を喜んでいるようである。山間は美景をのぞいては「いぶせく」「おほほしき」世界である。万葉人の自己否定はかくて水清き吉野に

及び琵琶湖に及び、海に及んだのであろう。水の乏しい盆地にあってみず／＼しい美しさに憧れたらしい。こうして水の文学はより多く浪漫的であり、とくに海洋性は浪漫性と結びついている。海は万葉人にとって浪漫性のこよなきはけ口であり、紀伊の海、伊勢の海、瀬戸内海、北越の海、北九州の海、東海道等、目ぼしいのはすべて題材とされしかも幾多の秀歌が生まれた。たゞ從駕の作といったように朝廷の権威と結びついた場合には浪漫性は力を失って享樂的になりがちであるが、享樂性は自然觀照を助け叙景の發達に役立っている。具体的に例について見よう。

卷九(二七四〇)に浦島伝説をよんだ長歌が出ているが、「水江の 浦島児が かつをつり 鯛つりほこり 七日まで 家にも来ずて うなさかを すぎてこぎゆくに わたつみの 神の女に たまさかに いこぎあひ あひとぶらひ ことなりしかば かきむすび とこよにいたり わたつみの 神の宮の うちのへの たへなる殿に たづさはり ふたり入りゐて 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを よのなかの おろかびとの わぎもこのりてかたらく しましくは 家に帰りて 父母に 事ものらひ あすのごと われは来なむと 言ひければ」、とうたったあたり、海にたいするロマンチックな憧れが明らかにみられ、反歌でも、

とこよべにすむべきものをつるぎたち己しが心からおそやこの君

というように浦島が里心を起したのを罵っている。これは海にたいする伝奇趣味の現れであるが、卷三には、「伊勢の海のおきつ白なみ花にもがつつみて妹が家づとにせむ」(三〇六)という安貴王の作がある。伊勢の国に行幸があった時人麿が京に残ってよんだという歌も卷一に見える。

あみの浦に船のりすらむをとめらがたまもの裾に潮みつらむか (四〇〇)

くしろつくだふしの崎に今日もかも大宮びとのたま藻かるらむ (四一一)

潮さるにいらごの島べこく船に妹のるらむか荒き島みを (四一二)

これらの歌にもより現実的な意味における海への憧れが見られるが、遊覧趣味と結びついたものである。人麿には海の旅をうたった秀歌が多く、とくに巻三には、

たまもかるみぬめをすぎて夏草の野島の崎に船近づきぬ (二五〇)

淡路の野島の崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす (二五二)

等八首の歌が「柿本朝臣人麿呂羈旅の歌」として出ているが、海の旅を喜ぶ気もちが言外にあふれている。石見の国から妻に別れて上京した時の長歌(二三二)にも、「か青なる たま藻おきつ藻 朝羽ふる 風こそよせめ 夕羽ふる浪こそ来よせ 浪のむた かよりかくより たま藻なす より寝し妹を」、とうたったりして、海洋趣味を深く身にしめていたことがしられる。おそらく本質的にロマンチックな人麿の性格とつながりがあるのであろう。黒人にも海の旅をうたった秀歌がある。

赤人は富士山をよんだ歌で有名になっているが、巻六には海の旅をよんだ長歌が数首みえる。あまり秀れたのはないが、「いなみ野の 大海の原の 荒たへの 藤井の浦に 鮪釣ると あま船みだれ 塩焼くと ひとぞさはなる 浦をよみ うべも釣はず 浜をよみ うべも塩やく あり通ひ みますもしるし 清き白浜」(九三八)、とうたったあたり海にたいして興味をよせていたことがしられ、反歌のなかには、

わかの浦に潮みちくれば濁をなみ葦べをさしてたづなきわたる (九一九)

といった秀歌もみられる。「わかの浦に」の方には大らかな海への景観にたいする喜びの気もちがあふれている。赤人と同時代の笠金村も海の旅をよんだ長歌を残しているが、巫流の作でさしてすぐれたのはない。巻三に「羈旅の歌一首並に短歌」として、若宮年魚麿が誦したという逸名氏の長歌がのっているが(三八八)、「わたつみは くすしきものか 淡路島 なかにたておきて 白浪を 伊予にめぐらし るまち月 あかしの門かゆは 夕されば 潮をみたしめ

明けされば 潮を干しむ 潮さるの 浪をかしこみ 淡路島 磯がくりゐて いつしかも この夜あけむと さもらふに」、というように、海そのものになりたいする好奇心の動きが見えるのは面白い。

巻七には古歌集所出の歌がまとめてだしてあるなかに海の歌が多く見られる。すなわち一一六一以下「羈旅にて作れる」として掲げた八十六首の大部分は海辺関係の作で、秀れた作が多い。その直前に「撰津にて作れる」としてだしてある二十一首の大部分も海辺関係の羈旅歌であり、雑歌や譬喩歌（広義）のなかにも海洋性をおびた作が少なくない。具体的な作品についてはのちにのべるが、藤原朝から奈良朝の初頃にかけての作らしく、海辺の歌にふさわしいようなゆったりした趣に富んでいる。作者不明の歌ばかりであるが、一一九五の歌の左註に、「右の七首は藤原卿の作」とあり、藤原卿は普通契沖の説に従い北卿藤原房前とされているが、房前の作はほかに万葉集に一首あるにすぎず、歌風も合わない。管見によれば藤原卿はおそらく宇合であろう。宇合は巻一に「式部卿藤原宇合」、巻三に「式部卿藤原宇合卿」、巻八に「藤原宇合卿」、巻九に「宇合卿」として幾首かの歌があり、歌風から見てもしっくりする。それから、

大葉山霞たなびきさよふけてわが船はてむ泊しらずも（二二四）

という歌は巻九に「碁師の歌」として重出しているが、その直前に「宇合卿の歌三首」として三首の歌があり、その点からも宇合と見た方が自然であろう。宇合は奈良朝初期の人間であり、碁師もほぼ同時代と考えられるから、巻七に古歌集所出とある作の時代も凡そ推定できる。宇合は不比等の第三子で、靈龜二年遣唐副使、養老三年常陸国守、神龜三年難波宮の改造に従い、天平四年西海道節度使に任ぜられ、海とは関係が深かった。巻一に、「大行天皇（文武天皇）難波に幸せる時の歌」として、

たまもかる沖へはこがじしきたへの枕へのひと忘れかねつも（七二）

という歌をのせ、「式部卿藤原宇合の作」とある。天平前後から難波宮をうたった歌が急にふえているのは、難波宮の改造とつながりがあるのであろう。(天平十六年難波に都遷しがあった)。巻九にはなお、

なにはがた潮ひにいでてたまもかるあまをとめどもなが名のらさね(一七二六)

というのがあるが、これは丹比真人の作である。同じ巻の、

ありそべにつきて漕がさねからひとの涙をすぐれば恋しくあるなり(一六八九)

は相聞歌の性質をかねたものである。

三

人麿も赤人も宮延歌人だったが、一体に海に興味をよせた歌は宮延を背景とする場合が多い。巻三に長忌寸意吉麿が応詔の作として、

大宮の内まできこゆ網引すとあごととのふるあまの呼びごゑ(二三八)

という歌が出ているが、これは難波宮へ行幸あつた時の作という。巻九には大宝元年持統文武両帝が紀伊の国に行幸なされた時の歌として、

妹がためわれ玉もとむ沖べなる白玉よせこ沖っ白なみ(一六六七)

以下十三首の短歌がのせてあるが、その中の一首、

風なしの浜の白なみいたづらにここによりくる見るひとなしに(一六七三)

は、左註に憶良の「類聚歌林」に長忌寸意吉麻呂の応詔の作と見える由ことわつてある。(なお「妹がため」の歌は舒明天皇あるいは斎明天皇が紀伊の国に行幸あつた時の作として類歌が一首距てゝ前に見える)。

卷十八には太上皇（元正天皇）が難波宮に滞留中左大臣の橘諸兄と唱和しあつたりした歌七首（四〇五六―）を伝え、卷六には天平六年春三月聖武天皇が難波宮に行幸なさつた時赤人らがよんだ歌六首（九九七―）をのせている。卷二十にも天平勝宝八年太上天皇（聖武天皇）と太后（光明皇后）が河内離宮から難波宮に御幸があつた時の作（四四五七―）がまとめてのせてあるが、いずれも海辺の勝景をたゞえ遊覧を楽しんでいる。難波は古くから時に皇居となり、また海外交通の要津とされていたので、難波宮にもたび／＼行幸があり、かく作歌の題材とされたのであろう。

家持も海を好んでよんでいるが、官吏として朝廷や国庁の威力を背景とした享樂的な遊覧の作が多い。卷六に、「狹残きさの行宮にて大伴宿禰家持の作れる歌二首」とあるなかに、

みけつくに志摩のあまならしま熊野の小船にのりて沖べこぐ見ゆ（一〇三二）

という作があるが、これは若年時代のものらしい。天平十二年伊勢国に行幸があつたとき内舎人の大伴家持が河口の行宮でよんだという歌（一〇二九）がすぐ前に出ているから、同じ折の作であろう。卷二十には、「私の拙懷を陳ぶる一首并に短歌」（四三六〇）、として難波宮をうたった歌がのせてあるが、「きこしめすよもの国より たてまつる貢の船は 堀江より 水脈びきしつ 朝なぎに 楫ひきのぼり 夕汐に 棹さしくたり あぢむらの 騒ぎきほひて 浜にいでて うなばら見れば 白なみの 八重をるがうへに あま小舟 はららにうきて 大みけに つかへまつると をちこちに いさりつりけり」というように御いつと結びつけて勝景を讃えている。其他越中守として在任中越の海をうたった作が卷十七以下に多く見える。

従駕応詔の作が享樂的になりがちなのは朝廷の權威を背景とし集団意識に支えられているからで、したがって秀歌には乏しいが、万葉集の海洋性の一つの支柱をなしていることは争いがたい。「享樂的」は広義。外遊と行幸供奉と

は当時海洋性にたいする大きなけ口になっていたらしい。遺唐使等の場合は不安を伴いがちであったが、一面には形式化しやすく享樂的傾向をも示すことさききのべたごとくである。

四

海に關係した秀歌を拾つてみる。たゞし右に例歌としてあげたものは挙げない。

斐田津に船のりせむと月まてば潮もかなひぬ今はこぎいでな（八）

これは類田の王の歌とも舒明天皇の御製とも伝えられているが、何れにしても悠揚迫らぬ大らかなしらが海洋的なゆたけさを感じさせる。

わたつみのとよはた雲にいり日みしこよひの月夜あきらけくこそ（一五）

中大兄皇子（天智天皇）の三山の歌の反歌としてのせ、在註に、「右一首の歌は今案するに反歌に似ず。但日本この歌を以て反歌に載す。かれ今猶この次に載す」とあるが、海洋的なゆたけさと壮美を基調とした歌で、まのあたり海を見ての作に相違ない。同じく反歌としてあげた作に印南国原がうたつてあり、「古義」は、「此印南の海辺にてよませ給ふなるべし」、としている。万葉集を通じての秀歌の一と思われのが、結句（原文「清明己曾」）の訓みについて定説を見ないのは残念である。

いづくにか船はてすらむ安礼の埼こぎたみゆきしたななし小舟（五八）

高市黒人の作で、「安礼の埼」は「古義」には美濃国かとしているが、美濃とすれば海岸の歌にはならない。「いづくにか船はてすらむ」という句法から考えて当然海岸か湖畔での作と考えられ、「太上天皇（持統天皇）参河国に幸せる時の歌」と詞書が見えるから、三河の海岸の地名とする説に従うべきであろう。

ますらをがさつ矢たばさみ立ちむかひ射る形的形は見るに清けし(六一)

舎人娘子が従駕の作で、形的の浦は伊勢の国の地名である。「射る」までは序になっていて、技巧の勝った歌であるが、調子が美しく勝景に接しての感激の程がしのばれる。たゞし「伊勢国風土記」に類歌があり、当地に行幸があった時の御製としている。もと入海だったのが、当時は「今已跡絶成三江湖」とあり湖になっていたらしい。

あしべゆく鴨のはがひに霜ふりて寒きゆふべはやまとし思ほゆ(六四)

難波宮に行幸があった時に志貴皇子がよんだ歌で、難波の海岸の近くでの作と見てよい。

人麿が石見の国から上京するとき妻に名ごりを惜しんでよんだ相聞の長歌(一三二)については前にのべた。また巻三に「柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首」とあるうち、「玉藻かる」「淡路の」の二首は例歌としてあげたが、

ともしびのあかし大門に入らむ日やこぎわかれなむ家のあたり見ず(二五四)

あまざかるひなの長ぢゆこひくればあかしの門よりやまと島見ゆ(二五五)

等も秀歌として聞え、同じく巻三に見える、

名くはしきいなみの海のおきつなみ千重に隠りぬやまと島ねは(三〇三)

おほきみの遠のみかどとあり通ふ島とを見れば神代し思ほゆ(三〇四)

等も海路でよんだ歌としてすぐれている。調子も同様にはりきっていて、同じ旅の往路と帰路の作かと思われる。

大海に島もあらなくにうなはらのたゆたふ浪に立てる白雲(二〇八九)

巻七に出ている歌で、在註に「右の一首は伊勢に駕に従へる作」とあるのみで、作者は不明であるが、旋律美に富んだ秀歌で、海洋的な壮美をうたっている点に特色がある。やはり巻七に出ている、

うなはらの道遠みかもつくよみの明りすくなき夜はくだちつつ(二〇七五)

なごの海を朝こぎくればわたなかに鹿兒ぞ鳴くなるあはれそのかこ（二四一七）
 等もよい歌である。

いははらの清見の埼の三保の浦おほきみのみことかしこみ夜見つるかも（二九六）

風見れどあかぬたごの浦おほきみのみことかしこみ夜見つるかも（三九七）

卷三に、「田口益人大夫上野国司に任ぜられし時駿河浄見埼に至りて作れる歌二首」として出ている歌で、官吏が任国に赴く途すがらよんだ作として注意される。益人は和銅元年上野守に任ぜられているから作歌年時代もほど推定できる。こうした人物が東国に国司として赴任していることは、東歌の編集と何らかの関係が考えられなくもない。（東歌に上野の国の歌が特に多い点と合せて一考したい。）

次に卷十四の巻頭に東歌として出ている、

なつそひくうなかみ鴻の沖つすに船はとどめむさ夜ふけにけり（三三四八）

かつしかのままの浦みをこぐ船のふなびと騒く浪たつらしも（三三四九）

等も秀れた歌である。前者は上総の国の歌、後者は下総の国の歌とあるが、東歌としての特色は稀薄である。卷十四には、

しろたへ衣の袖をまくらがよあまこぎく見ゆ浪立つなゆめ（三四四九）

をくさをとをぐさすけをと潮舟のならべて見ればをぐさ勝ちめり（三四五〇）

等の作も見える。「をくさをと」の歌は「潮舟の」を修辭として用いているのであるが、とにかく海辺を背景とした恋の歌であろう。海に關係した相聞歌は卷十二（三一六〇―三二七七）にも集めてあるが、

わぎもこに触るとはなしにありそみにわがころもではぬれにけるかも（三一六三）

なにはがたこぎでし船のはろばろに別れきぬれど忘れかねつも(三二七一)
 いざりするあまの楫のとゆくらかに妹はこころにのりにけるかも(三二七四)
 など比較的秀れた作が多い。たゞし単に海を修辭として用いた作もまじっている。

卷二十の防人歌にば海をよみこんだのが少くない。東海道や難波の海瀬戸内海をよみこんでいる。

大君のみことかしこみ磯にふり海原わたる父母をおきて(四三二八)

なには津によそひよそひて今日の日や出でてまからむ見る母なしに(四三三〇)

海原を遠くわたりて年ふとも児らがむすべる紐とくなゆめ(四三三四)

今かはる新防人が船出する海原のへに浪なさきそね(四三三五)

百くまの道は来にしをまたさらにやそ島すぎて別れかゆかむ(四三四九)

おしてや難波の津より船よそひあれはこぎぬと妹に告ぎこそ(四三六五)

白浪のよそる浜べにわかれないともすべなみ八たび袖ふる(四三七九)

国々のさきもりつどひ船のりて別るを見ればいともすべなし(四三八一)

津の国の海のなぎさに船よそひ発し出も時に母が目もがも(四三八三)

行さきに浪音ゑらひ後方には子をと妻をとおきてとも来ぬ(四三八五)

等も面白い。四三二九、四三三一、四三五五、四三五九、四三六三、四三六八、四三八〇、四三八四、四四一四、等

も海をよみこんでいる。たゞ防人として赴任する旅路でよんだのであるから、叙景歌というよりは叙事的な歌が多く
 も単なる景物として附屬的によまれている。抒情性をおびたのももとより少くない。

遠江白羽の磯と贅の浦とあひてしあらばことも通はむ(四三三四)

防人の堀江こぎいづるいつて舟楫とるまなく恋はしげけむ(四三三六)

たたみけめむらじが磯のはなり磯の母を離れて行くが悲しさ(四三三八)

しほ船の舳越そ白浪にはしくもおふせたまほか思はへなく(四三八九)

これらは修辭的に海をよみこんだものであるが、多くは目にふれた実景をよみこんだものであろう。

さきにもちよつとのべたように、同じく卷二十の防人歌にまじって家持が防人をうたった長歌が三首見える。「追ひて防人の悲別の心を痛みて作れる歌一首并に短歌」と題し、天平勝宝七年二月八日兵部少輔たりし家持が防人やその家人に同情してよんだ長歌には、「あしがちる 難波の御津に 大船に ま楫しじぬき 朝なぎに かこ整へ 夕潮に 楫ひきををり あどもひて こぎゆく君は 波のまを い行きさぐくみ ま幸くも 早く到りて おほきみのみことのまにまますらをの 心をもちて ありめぐり 事しをはらば 恙はず 帰り来ませと、齋瓮を 床べにすゑて、云々」(四三三二)とある。

次に「防人の情に為りて思を述べて作れる歌一首并に短歌」と題し、やはり防人の身になり代つてよんだ代作めいたのがあるが、中に、「あしがちる 難波に 来ゐて 夕潮に 船を浮けすゑ 朝なぎに 舳向け漕がむと さもらふと わがをる時に 春霞 島めに立ちて たづがねの 悲しく鳴けば はるばるに 家を思ひで 負そ矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも」(四三九八)と、難波津に滞留中の情景をうたったところがあり、反歌にも海をよみこんでいる。二月十九日の作であるが、同年二月二十三日には「防人の悲別の情を陳ぶる歌一首并に短歌」と題して、防人が父母や妻子に名残を惜しみつゝはるくゝと赴任してきた悲痛な思をうたい、長歌にも反歌にも海をよみこんでいる。これは二月八日の作と同巧の作であるが、いくらか趣が異っている。これらによって海上をばはるくゝと送られて行つた防人らの姿をおぼろげに思い浮べることができ、悲痛な心情もおもいやられる。反歌のなかで、

うなはらに霞たなびきたづがねの悲しき宵は国へしおもほゆ（四三九九）
 家おもふといをねずをればたづがなく葦べもみえず春の霞に（四四〇〇）

擬古のあとはあるが、優雅なすぐれた作である。長歌は万葉集を通じて見れば特に秀歌とはいいがたいが、ついでにのべたのである。

五

以上あげたもののほか、巻一の、

あられうつあられ松原すみのえのおとひとめと見れどあかぬかも（六五）

も相聞歌の性質をおびた叙景歌として興味深い。長皇子の作で、海辺の勝遊を楽しむ気もちがリズムにまであふれている。巻四には丹比真人笠麻呂が筑紫にくたった時に作ったという長歌があるが、「直向ただふ 淡路をすぎ 粟島をそがひにみつ つ 朝なぎに かこの声よび 夕なぎに 楫の音しつ つ 浪のへを いゆきさぐくみ 磐のまを いゆきもとほり いなびつ ま 浦みをすぎて 鳥じもの なづさひ行けば 家の島 荒磯のうへに うちなびき しじにおひたる なりのそが などかもいもに のらず来にけむ」（二五〇九）、というように、恋情をおりませつつ航路を叙し、相聞歌と道行歌を兼ねたような性質を帯びている。人麿や黒人等の影響が見えるが、歌格の整った比較的によ

い歌である。巻三には笠金村が角鹿つるか（敦賀）津で船に乗った時の作が見える。

越の海の 角鹿の浜ゆ 大船に ま楫ぬきおろし いさなとり 海ぢにいでて あへきつ つ わがこぎゆけば
 ますらをの たゆひが浦に あまをとめ 塩やくけぶり 草まくら 旅にしあれば ひとりして 見るしるしな
 み わたつみの 手にまかしたる たまたすき かけてしぬびつ やまと島ねを（三六六）

反歌

越の海のとゆひの浦を旅に見ればともしみやまとしのびつ (三六七)

表現はたど／＼しいが、稚拙な趣があつて金村の作として面白い。角鹿は越前の国にあり、後世敦賀と呼ばれた。

この歌の次に、石上大夫の歌として、

大船にま楫しじぬきおほきみのみことかしこみいそみするかも (三六八)

という歌があり、左註に、「右今案ずるに、石上朝臣乙麻呂越前の国守に任せられき、けだしこの大夫か」と見えている。

次に「和ふる歌」として、

もののふの臣のをとおほきみのまけのまにまにきくといふものぞ (三六九)

という歌を掲げ、「右の作者いまた審ならず、但笠朝臣金村の歌の中に出づ、」と註している。石上乙麻呂の作は、巻六にも土佐国に流された時の歌(二〇三)がのせてあるが、反歌に海をよみこんでいる。其の時妻(であろう)がよみおくれた歌は前に紹介した。

巻六に車持朝臣千年が住吉の浜をうたった長歌があるが、

いさなとり 浜べを清み うちなびき おふるたま藻に 朝なぎに 千重浪来より 夕なぎに 吾百重浪よる

へつ浪の いやしくしくに 月にけに 日にみるとも 今のみに あきたらめやも 白浪の いさきめぐれる

すみのえの浜 (九三二)

反歌

白浪の千重にきよするすみのえの岸のはにぶにほひて行かな (九三二)

というように住吉海岸の景観を讀んでいる。同じ巻に太宰府の役人たちが香椎宮に詣でて帰路香椎浦に馬を駐めてよんだという一連の作が見える。太宰帥大伴旅人の、

いざ児ども香椎の瀉に白たへの袖さへぬれて朝なつみてむ（九五七）

をはじめ、太宰大式小野老の、

時つ風ふくべくなりぬ香椎瀉潮ひの浦にたまも苅りてな（九五八）

豊前守宇奴男人の、

ゆきかへりつねにわがみし香椎瀉あすゆのちには見むよしもなし（九五九）

等いずれも海辺の勝景を樂しみ、名残を惜しんでいる。葛井大成の、

あまをとめ玉求むらしおきつなみかしこき海に船出せり見ゆ（一〇〇三）

というのも巻六に見える。

巻六の巻尾に「田辺福麿歌集中に出づ」として長歌が多く出ているが、福麿の自作のものらしい。なかに「難波宮にて作れる歌」「敏馬の浦を過ぐる時作れる歌」というのがあり、どちらも海をよみこんた叙景歌として比較的秀れている。

やすみしし わがおほきみの あり通ふ 難波の宮は いさなとり 海かたづきて 玉拾ふ 浜辺を近み 朝羽
ふる 浪のとさわき タなぎに 權かむのと聞ゆ あかときの ねさめにきけば わたつみの 潮ひのむた 浦すに
は ちどり妻よび あしべには たづがねとよむ みるひとの 語りにすれば きくひとの 見まくほりする
みけ向ふ あぢふの宮は 見れどあかぬかも（一〇六一）

反歌

あり通ふ難波の宮は海近みあまをとめらがのれる船みゆ(一〇六三)
 潮ひればあしべにさわくあしたづの妻よぶ声は宮もとどろに(一〇六四)

これは難波の宮をうたったもので、敏馬の浦をよんだのは、

やちはこの 神のみよより 百船のはつる泊りと やしまぐに 百船びとの 定めてし 敏馬の浦は 朝風に
 浦浪さわき 夕浪に 玉藻は来よる 白まなご 清き浜べは ゆきかへり 見れどもあかず うべしこそ 見る
 人ごとに 語りつき しのびけらしき もも世へて しのばえゆかむ 清き白浜(一〇六五)

反歌

まそかがみ敏馬の浦はもも船の過ぎてゆくべき浜ならなくに(一〇六六)

浜清み浦うるはしみ神代より千船のとまる大和田のはま(一〇六七)

なお福麿の歌に関しては卷十八の巻頭に、「天平二十年春三月二十三日左大臣橘家の使者造酒使令史田辺福麿を大伴宿禰家持の館に饗す、爰に新歌を作り、并に便ち古詠を誦して各心緒を述ぶ」、として、

なごの海に船しまし借せ沖にいでて波たち来やとみてかへりこむ(四〇三二)

以下の四首をのせ、「右の四首は田辺史福麿」と註しているが、うち三首は海をよみこんでいて、いかに海辺の景に興を催したかがしられる。たゞし第四首(四〇三五)は卷十(二九五五)の重出で、古歌を誦したものらしく、(海の歌ではない、)第二首(四〇三三)も相聞歌の性質をおび、あるいは古歌を誦したのかもしれない。以下家持福麿等の一行で「布勢の海水」に遊び多くの歌を残している。海水といっても海辺の入海で海辺の歌とみなしてよく、歌風も多く海をよむと同様の調子になっている。

いかにあらむ布勢の海ぞもここだくに君が見せむとわれをとどむる(四〇三六)

たまくしげいつしかあけむ布勢の海の浦をゆきつつたま藻ひりはむ（四〇三八）

布勢の浦を行きてし見てばももしきの大宮ひとに語りつぎてむ（四〇四〇）

これらは前日に福麿のよんたもの。途すがら馬上でよんた歌。

浜べよりわがうちゆかば海べより迎へもこぬかあまの釣舟（四〇四四）

いよいよ目的地に着いて遊覧しての作、

神さぶる垂姫の崎こぎめぐり見れどもあかずいかにわれせむ（四〇四六）

おろかにぞわれは思ひしをふの浦のありそのめぐり見れどあかずけり（四〇四九）

これは福麿の作であるが、家持や掾久米朝臣広繩の作もあり、

垂姫の浦をこぎつつ今日の日はたぬしく遊べ言ひつきにせむ（四〇四七）

というような遊行女婦（うきめ）土師（はにし）の作も見える。福麿は橘諸兄（たちばなもろちか）の使臣としてきたのであり、主賓としてもっとも作が多いが

力倆も相当にあつたのであろう。当時は既に相当の老齡であつた。

六

特殊なものとして卷十五に天平八年の遣新羅使人等が航行の途上でよんた一群の作品が集められているが、真実味
のあふれた歌が多い。

まず出発に際し家人らと名ごりを惜しんで贈答した歌がはじめに見える。

君がゆく海べの宿に霧立たばあがたちなげく息としりませ（三五八〇）

大船を荒海（あゝうみ）にいだしいます君つつむことなくはや帰りませ（三五八二）

まさきくて妹がいははば沖つ浪千重に立つともさはりあらめやも(三五八三)

愛妻とよみ交した歌らしいが、出発してからもさすがに妻をおもうた作が多く、海上の旅の寂しさを訴えている。

潮待つとありける船をしらずしてくやくしく妹を別れきにけり(三五九四)

帰るさに妹に見せむにわたつみの沖つ白玉拾ひて行かな(三六一四)

うなはらをやそ島がくりきぬれどもならのみやこは忘れかねつも(三六一三)

すぐれた叙景歌も見える。

わたつみのおきつ白浪立ちくらしあまをとめども島がくる見ゆ(三五九七)

山のはに月かたふけばいざりするあまのともしび沖になづさふ(三六二三)

われのみや夜船はこぐとおもへれば沖へのかたに楫のおとすなり(三六三四)

後の二首は「長門浦より船出せし夜月光を仰ぎ観て作れる歌三首」とある中の二首である。

まゝ長歌をもよんでいるが、とくに三六三七の「物につきて思を発はず歌」とある作は船中の思と景とをつぶさに叙し得ている。

これやこの名におふ鳴門の渦潮にたま藻刈るとふあまをとめども(三六三八)

浪のうへにうきねせしよひあどもへかころがなしく夢にみえつる(三六三九)

あかときの家こひしきに浦みより楫の音するはあまをとめかも(三六四一)

とかく妻にたいする恋情がからんで来やすい。

暴風にあつて豊前の国分間浦に漂着してよんた作も「吾妹子」「妹」をうたった歌が大部分をしめる。

わぎもこがいかに思へかぬばたまのひと夜もおちず夢にしみゆる(三六四七)

ひさかたのあまてる月は見つれどもあが思ふ妹にあはぬころかも（三六五〇）
がなかなには季節の推移に注目したような作もないではない。

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ（三六五五）

旋頭歌をも試みている。

あまのはらふりさけみれば夜ぞふけにける、よしゑやしひとりぬる夜はあけはあけぬとも（三六六二）
例によって弧愁を訴えた作ながら、調子のなだらかなよい歌である。

夕されば秋風寒しわざもこがときあらひころもゆきてはや着む（三六六六）

郷愁をうたった秀歌である

ひさかたの月は照りたりいとまなくあまの漁火はともしあへりみゆ（三六七二）

筑前の国の韓亭に滞留中の作で、月光と漁火をよみこんで特殊な美しさがみられる。

壱岐島では雪連宅満の病死にあい、挽歌をよんでいる。壱岐から対島に渡っているが、歌は対島までの往路の作が大部分をしめ、帰路の作は末尾に若干見えるのみである。帰路の作は切実に懐郷の念を訴えている。

最後の作、

大伴の御津のとまりに船はててたつたの山をいつかこぎゆかむ（三七二二）

以上全作を通じて郷愁と相聞の歌が最も多く、まゝ叙景歌をまじえている。海洋的な浪漫性に乏しく、旅路の寂寥感とわびしさが勝っているものたりないが、とにかく一つの海洋文学として特色を見せている。

かくて万葉集の海辺関係の歌は、脊景や取材の方面から見ると、伊勢の海、紀伊の海岸、難波の海、瀬戸内海、九州北辺の海、北越の海岸、等が主になっているが、とくに難波の海から瀬戸内海をへて九州の北辺の海に關係した作が多いのは内外交通の要路に當っていた点から当然であろう。性質から見ると、叙景歌が多く、羈旅歌や相聞歌の性質をおびたのも少くない。また正面から海をよんだ歌のほかに、

大海の底を深めて結びてし妹がこころは疑ひもなし(三〇二八)

すずきつるあまのともしびよそにだに見ぬひとゆゑにこふるこのごろ(二七四四)

というように、海洋關係の事物に思を託してよんだ作も少くない。いわゆる寄物陳思の歌で、「分類万葉集に」について見れば多くの例が知られよう。歌全体が譬喩の性質をもつ狭義の譬喩歌もみえるが、これらはほとんどみな相聞歌である。なかには

白たまはひとにしらえずしらずともよし、しらずとも吾ししれらばしらずともよし(一〇一八)

といったような旋頭歌もある。

海洋關係の事物として万葉集の歌によみこまれているのは、船舶が多きをしめるこというまでもなく、植物では浜木綿、浜荻、なのりそ、のり、みる(海松)、などが目につき、魚介では、鯛、鱸、鰻、小螺、忘貝、うつせ貝、白珠、等が多くよまれている。事物とはいえないが、あまやあまおとめも当然よみこまれ、漁火も海洋關係の景物として美観を添えている。やはり「分類万葉集」について見れば、詳しいことがわかるが、あまり豊富とは言えない。珍しい例としては、「蟹の為に痛を述べて之を作れり」と左註に見えるように、食膳にのぼされた蟹の思いをうたった長歌(三八八六)が卷十六にのせてある。

まず「おしてるや 難波のおえ小江に いほつくり 隠りてをる あし蟹を おほきみめすと 何せむに わをめすら

めや あきらけく わが知ることを うたびとと わをめすらめや 笛ふきと わをめすらめや 琴ひきと わをめ
 すらめや」、と皮肉にうたい、「あしひきの この片山の もむ榎を いほ枝はぎ垂り あまてるや 日のけにほし
 さびづるや からうすにつき 庭にたつ すりうすにつき おしてるや 難波の小江の 初たりを からく垂りきて
 すゑひとの つくれる瓶を 今日ゆき あすとりもちき わが目らに 塩ぬりたまひ もたひはやすも もたひはや
 すも」、と辛辣な諷刺をこめてゐる。「古義」には、「今までは世に隠れ居て、何の賞なくありしに、料らずも此度
 天皇にめされて、供御となり、吾身の榮さるる事、嗚呼さても權しや辱しや、と深く喜べる謂なり、中間には辛き目
 にあふ事を、苦しきやうに云て、終に賞さるる事を權て結めたり」、とあるが、左註に痛をのべたとあるのが正しく
 諷刺の歌とみるべきであろう。鹿をうたつた作とならべて、「乞食者の詠」とあるから、こうした類の人間が樂器に
 合せて謡い廻つたのであろう。

なおこゝに考えておきたいのは巻七に見える海洋関係の歌である。前記のごとく巻七に「羈旅にて作れる」として
 古歌集所出の羈旅歌が八十六首（二二六一—二二四六）ばかりまとめてだしてあるが、大部分は海に關係した作であり
 そのすぐ前に「撰津にて作れる」としてだした作（二二四〇—二二六〇）の中にも海洋關係の歌が多く見え、雑歌や譬
 喩歌にも海に關係した作が少くない。ところが巻七と同じく作者不明の歌を集めた巻十には海に關係した作がほとん
 ど見えない。一九二〇、一九三〇、二二四四、のように相聞歌に海邊關係の事象をよみこんだもの、

天の海に月の船浮け桂楫かけてこぐみゆ月人をとこ（二二三三）

のように譬喩として修辭的に海や船をよんだ作、等が数首見あたるほか、海邊關係の叙景歌として、

おしてる難波堀江の葦べには雁ねたるかも霜の降らくに（二二三五）

がまぎれこんでいるにすぎない。万葉集の作者不明の巻々のうち、巻十一、十二、十三、十四、は特殊な内容の歌を

集めたものであるから、これら四巻を別とすると、残るのは巻七と巻十であるが、この二巻の間に右のような現象が見られるのは、元来両巻が姉妹篇のような性質をもつためではなからうか。もっとも同じく作者不明の歌を類聚しながらも、巻七は雑歌、譬喩歌（相聞歌）、挽歌、というように大別したのを更に類纂的に細分しているが、巻十は巻八と同じく雑歌相聞といった種類別と春夏秋冬の季別を分類基準として併用したうえ、更に細かく類纂した形になっており、必ずしも単純な姉妹関係にあるとは考えられないが、もと／＼は姉妹関係にあったものに更に手が加わったのでこうした相違が生じたのであろう。元来万葉集の巻々の分類様式は必ずしも統一的な基準に従おうとせず、むしろ戯書と同様に多彩と変化を求める意識もはたらいっているようである。とにかく右のような事情から、作者不明の巻々や成立過程に関し、若干の手がかりが得られそうに思うが、他日を期したい。

高山樗牛は「海註四の文芸」という文章において、ヨーロッパの海洋文学について述べ、ハイネやバイロンの海の文学を礼讀し、日本の海洋文学の貧しさを嘆じている。ギリシャ語の「タラッター」や英語の「オーシャン」に比べて、日本語の「うみ」は「まことに面白くない」とし、「うなばら」とか「わだつみ」といったみごとな言葉には注意していない。言葉は仕方がないとして、是の海国の日本に海の詩人と云ふものが無いのは、如何した訳であらうか、少く歴史に通ぜざる者の何人も知る如く、本邦建国の歴史は勿論の事、中世の頃まで、吾々の祖先は海国民として恥しからぬ事業を為して居ったのである、近世鎖国の国是が如何に国民の志氣に影響したにせよ、詩人文学者乃至美術家までが、此の天地間の一大壮美の現境を遺却し去ったかの觀あるは、如何いふ訳であるか、」と説いている。明治三十五年に執筆したものである。明治三十五年といえは、歌壇では正岡子規により万葉主義が高唱された頃であるが、樗牛は平家物語や近松の心中物の悲劇美には共鳴しながら、万葉集は読んでいなかったのであらうか。けれども平安朝以後の文学については、樗牛の嘆きは大いに当っているのであり、古代文学においては万葉集の

ほか、古事記もそうとうに海洋性を帯びているが、平安朝以後そうした古代文学の伝統を發展させることができなかつたのである。

附記 万葉集の本文は訓読体による。訓法は主として沢瀉博士の「新校万葉集」に従い、岩波の「日本古典文学大系」等をも参考した。

註一 岩波書店「日本古典文学大系」内「万葉集」四の補注参照。

註二 「上代文学」第十一号、拙稿「藤原卿の問題」参照。

註三 橘諸兄については、「上代文学」第五号、第七号、第九号に連載の拙稿「橘諸兄論」で詳説し、福磨との関係についても触れておいた。

註四 「高山樗牛全集」第五卷所収。明治三十五年六月刊の「太陽」（臨時増刊「海の日本」号）第八卷第八号に載ったものである。